

学校法人七郷学園 幼保連携型認定こども園 蒲町こども園（宮城県）

「なぜ土は水の中で沈むのかな」「泥水はどうやったらきれいになるのかな」「この水って飲めるのかな」と、日常の泥遊びから生まれた疑問。保育者は、子どもたちの気づきや発見、対話のプロセスを丁寧に整理していくことで、子どもたちの主体的で対話的な深い学びを明らかにしていきます。子ども自身が疑問を解決するプロセスの中で、「科学する心」が育まれています。

「コーヒー屋さんごっこ」（5歳児／7月）



ペットボトルを切ってじょうごのように活用し、泥水をドリップコーヒーに見立ててコーヒー屋さんごっこを楽しんでいる。

Y児「美味しいコーヒーできるかな」

R児「少しずつ下に落ちてきたね」

Y児「コーヒー（泥水）をいっぱい入れるとなかなか落ちてこないね」

R児「ちょっとずつ入れてみたらどうかな」



コーヒーフィルターを1枚、2枚と重ねていくと泥水の濁りの濃度が変わってきたことに気が付き始めた。

<1枚重ねる>

Y児「あっ、ちょっとだけ色が変わったよ」「うすくなった」

T児「ほんとだ。もう一枚重ねてみい？」

<2枚重ねる>

Y児「見てみて。さっきより水が垂れていく速さがちょっと早くなったよ」

T児「ほんとだすごいね。あれ、フィルターが茶色くなってきてるよ」

Y児「泥がフィルターについているから水がきれいになってきているのかな」



<3枚重ねる>

Y児「ちょっとずつ透明になってきたね」
T児「でも、ちょっとだけまだ茶色いかな」
Y児「もう少し重ねてみようか」

<6枚重ねる>

T児「水道の水と同じ色になったよ。飲めるのかな」
Y児「匂いは…しないかな」
T児「飲めるかわからないけれど、お花とか野菜の水やりには使えそう」
Y児「そうだね。いい考えだね」
T児「でもどうして透明の水になるんだろう…。不思議な発見だね。」

コーヒー屋さんごっこを通じてろ過の方法を知り、子どもたちなりに試す姿が見られた。また、コーヒーフィルターの枚数を変えることで不純物が取り除かれ、フィルターでキャッチされることに気付いた。さらに、ろ過した水を洗い物や植物の水やりに再利用する姿も見られた。

先生に聞いてみました

泡遊びと泥遊び。別々の遊びから「この水はきれいになるのかな」「飲めるのかな」という疑問が芽生えたことで、保育者の“しかけ”が始まりました。子どもたちの会話を逃さないようにしながら、子どもたちが土や砂の沈殿に気づいたり、ろ過したりできるように性質の違う砂やフィルターを何気なく環境の中に忍ばせました。すると、年長組の子どもたちは、生活の中で経験したことを次々と遊びに活かし、疑問に思ったことを仮説を立てながら実践していきました。保育者は、子どもの力を信じ、失敗してもすぐに答えは出さず、次の“しかけ”を考えます。日々のうきうきタイムを撮影・記録し、子どもたちの

思考の変化や会話のやりとりを園内研修（あそびを支えるマネジメントサイクル）で振り返りながら、様々な視点で保育を見つめ直してきました。

現在は、草花をすりつぶしたり、絵の具を使ったりした色水遊びが盛んで、同じ素材を使用しても色の濃淡に違いが出ることに疑問をもち始めた子どもたちがいます。今後、この子どもたちが色相に興味をもつのか、物の分量に気づいていくのか、どのように遊びが展開していくのかをしっかりと受け止め、試行錯誤を重ねながら、課題を探究していく過程を重視していきたいと思っています。

↓ 論文全文はこちら



「この水って飲めるのかな」
— 泥遊びからはじまる
きれいな水への探究 —

